

関東形成外科学会 第303回東京地方会プログラム

2022年7月2日（土）14：00～17：00

開催場所：完全Web開催 <Zoomを用いたLive開催。後日配信は無し>

=====

下記のリンクをクリックしてウェビナーに参加してください：

<https://us06web.zoom.us/j/89658370838?pwd=Sm5LL1czL3BjWG5HUU5hUkEyMDFsQT09>

パスコード：715300

=====

今回の学術集会は、

「上記zoomのウェビナーへ参加を行い、事務局での確認がとれた方」

を参加者として取り扱わせていただきます。

参加証については上記確認をとれた方へ、事務局から参加証をお送りいたします。

We b参加を行ったのに参加証が届かない場合はお手数ですが

学会事務局（tprs-office01@shunkosha.com）までお問い合わせください。

【開催挨拶】14：00～14：10

<昭和大学 形成外科 高木信介>

【発表演題一覧】14：10～17：00

<座長：昭和大学 形成外科 高木信介>

① 手関節に生じたびまん型腱滑膜巨細胞腫（tenosynovial giant cell tumor）の1例

東京医科大学病院 形成外科

○山下 賢人、島田 和樹、松村 一

腱滑膜巨細胞腫は限局型とびまん型とに分類される。びまん型は膝関節や股関節などで発症するが手関節での報告は稀である。症例は55歳女性で、左手背の腫瘍でガングリオンを疑われ摘出試みるも困難であり当科に紹介となった。MRIで本疾患を疑われ全身麻酔下で摘出となった。日常診療で手関節の皮下腫瘍は第一にガングリオンや脂肪腫等を疑うが、稀に本疾患の事もあるので診断・治療法など文献的考察を踏まえて報告した。

② ハイドロキシアパタイト顆粒を用いた輪郭形成術 -美容目的とした先天異常疾患を中心として-

千葉大学医学部 形成外科

○玉川栄樹、三川信之、窪田吉孝、秋田新介

我々は以前より、先天異常疾患の顔面の硬組織の低形成や術後合併症に対してハイドロキシアパタイト

(以下 HA) 顆粒を用いた輪郭形成を積極的に行ない、良好な結果を得ている。主な使用目的は骨陥凹の修正や不足する骨組織の体積を増すためであるが、顆粒の性質上、大きな骨欠損をカバーするには限界がある。今回、臨床症例を供覧するとともに、HA 顆粒の性質に関する文献的考察を加えて報告する。

③ 妊娠を契機に増大したデスマトイド腫瘍の1例

昭和大学横浜市北部病院 形成外科

○今田陽、大塚尚治、小島永稔

症例は35歳、女性。妊娠時より子宮筋腫と診断され経過観察されていたが、徐々に増大し腹部腫瘍を自覚。疼痛も出現してきたためMRIを施行したところ、腹壁に $12.5 \times 7\text{cm}$ 大の腫瘍を認め、生検でデスマトイド腫瘍の診断となり手術を施行した。デスマトイドは筋膜や腱膜から発生する纖維種症の一つで浸潤性に増殖し局所再発を繰り返す。今回、妊娠を契機に増大したデスマトイド腫瘍を経験したので、文献的考察を含めて報告する。

④ 著明な下眼瞼外反を生じた結膜乳頭腫の1例

1) 新久喜総合病院 形成外科

2) 千葉大学医学部 形成外科

○福田 有里1、緒方 英之2、秋田 新介2、窪田 吉孝2、三川 信之2

結膜乳頭腫は良性扁平上皮腫瘍であるが外科的切除後の再発が多い。今回われわれは著明な下眼瞼外反を生じた結膜乳頭腫に対し、摘出前後で冷凍凝固療法を併用し再発なく良好な結果を得られた症例を経験したので文献的考察を加えて報告する。【症例】71歳、男性。3年前より両側下眼瞼結膜に腫瘍が出現。生検により結膜乳頭腫と診断されている。冷凍凝固を併用した摘出術を施行し、外反は改善した。術後6か月経過したが再発はない。

⑤ Free partial toe flapによる指尖部再建術における、3Dモデルを用いたデザインの工夫

昭和大学藤が丘病院 形成外科

○沖野尚秀、高木信介、門松香一、大久保文雄

指尖部組織欠損に対する再建方法は、欠損範囲に応じて様々な方法があるが、末節骨の欠損が1cm以上存在する場合は、足趾からの遊離皮弁が有用である。本症例は、40代男性。右中指末節骨骨髓炎でデブリードマン施行後、約1.8cmの指尖部欠損を認めた。単純CTを元に、左母趾の3Dモデルを作成した。骨欠損の大きさ、皮膚、皮下の採取量、ドナー部の組織犠牲を考慮しデザインを決定し、再建した。改善点、若干の考察を加え報告する。

⑥ 口唇口蓋裂の軟口蓋瘻孔に対し島状大口蓋動脈粘膜骨膜弁により再建した症例

昭和大学藤が丘病院 形成外科

○境直隆、中原真理、大久保文雄、門松香一

症例は20歳、男性。左唇顎口蓋裂に対し、X-17年に前医口蓋形成術を施行された。X年に当院にて軟口蓋瘻孔に対して島状大口蓋動脈粘膜骨膜弁による再建を行った。今回我々は軟口蓋瘻孔に対して再建を行い、良好な治療経過を得られたため報告する。

⑦ 外陰部に発生した Steatocystoma multiplex の1例

- 1) 戸田中央総合病院 形成外科
- 2) 順天堂大学医学部 形成外科講座

○若山一生、清水梓、水野博司

Steatocystoma multiplex とは脂腺管の拡張した多発する囊胞性病変である。一般に思春期から成人早期の男女に性差なく出現し、多くは前胸部、上腕、大腿に好発する。外陰部の報告は国内外を含めて極めて少なく現在までの報告数は6件のみである。今回、我々は47歳女性の外陰部に生じた Steatocystoma multiplex を1例経験したため文献的考察を加え報告する。

⑧ 両側下顎骨骨折受傷後、頸部血腫による気管閉塞を発症した一例

- 1) 明理会中央総合病院 形成外科
- 2) 湘南鎌倉総合病院 形成外科
- 3) 日本医科大学 形成外科学教室

○下元麻梨子^{1,2}、上田百蔵²、兼行慎太郎²、黒川優太²、小川令³

目的：下顎骨骨折による気道閉塞は、偏位の大きい前歯部骨折によるものが多い。両側下顎骨骨折受傷後、頸部血腫による気道閉塞を発症した一例を経験したので報告する。症例：89歳男性。転倒し右下顎体部、左下顎角部骨折を受傷した。その後頸部血腫が拡大し気道閉塞を認めた。

考察：下顎骨骨折では偏位が少ない場合でも、頸部血腫による気道閉塞が起こることがある。既往歴、服薬歴を確認して慎重に身体所見をとる必要がある。

⑨ 骨盤内液体貯留により治療に難渋した臀部壊死性軟部組織感染症の1例

- 1) 昭和大学病院 形成外科
- 2) 昭和大学病院 頭頸部腫瘍センター

○松井容¹⁾、辰田紗世¹⁾、渡井彩²⁾、清水崇史¹⁾、竹内誠也¹⁾、櫻井裕基¹⁾、渋谷健¹⁾、大原卓也¹⁾、佐藤伸弘¹⁾

【はじめに】壊死性軟部組織感染症は急速に炎症、壊死が拡大し、致死率が高い疾患である。【症例】60歳女性、両側臀部の発赤・腫脹・疼痛で当院救急外来を受診した。同日、緊急合同手術で両側臀部のデブリードマンとストマ形成による便路変更を行い、計3回に及ぶデブリードマンを施行した。創管理では、VAC ultraによるNPWTを施行したが、後腹膜腔の液体貯留の診断治療に難渋した。CTガイド下穿刺が有効であり、当院での経験を報告する。

⑩ 指動脈穿通枝皮弁の挙上の工夫

- 1) 昭和大学病院 形成外科
 - 2) 昭和大学病院頭頸部腫瘍センター
- 大原卓也 1) 櫻井裕基 1) 辰田紗世 1) 渡井彩 2) 清水崇史 1) 竹内誠也 1) 渋谷健 1)
松井容 1) 佐藤伸弘 1)

指動脈穿通枝皮弁(Digital artery perforator flap; DAP flap)は、比較的大きい皮膚欠損にも適用可能で、主要血管を犠牲にすることなく挙上可能有用な皮弁である。

我々は同皮弁を指ブロック下に1時間程度の手術時間で挙上しており、低侵襲かつ簡便な皮弁と考えている。しかし、本邦での報告は少なく本皮弁が普及しているとは言い難い。

今回我々は、DAP flap の症例を検討し、文献的考察を交えながら本皮弁における工夫とポイントについて提案する。

⑪ 経結膜脱脂により下眼瞼後退を来した1例

- 1) 昭和大学藤が丘病院 形成外科
 - 2) 銀座すみれの花形成クリニック
- 竹原唯梨 1) 高木信介 1) 横山才也 2) 門松香一 1)

美容外科クリニックで経結膜脱脂を施行されたが、術後下眼瞼の下三白眼、睫毛内反をきたし受診された。下眼瞼後葉の拘縮による下眼瞼後退が原因と判断し、術後4.5ヶ月で septal turn over flap による LER 延長を行った。右の拘縮が高度で軽度の後退は残存しているが、初診時の自覚症状は消失した。今回われわれは下眼瞼後退に対する治療について若干の文献的考察を加え報告する。

⑫ 術前に多形腺腫と診断された耳下腺粘表皮癌の一例

昭和大学藤が丘病院 形成外科
○中原真理、高木信介、渡辺晃大、黒田正義、大久保文雄、門松香一
症例は24歳、男性。左耳下腺部の腫脹を主訴に当科を受診。針生検による細胞診で多形腺腫と診断し、耳下腺腫瘍摘出術を施行した。切除標本では中間型粘表皮癌と診断された。粘表皮癌は唾液腺に好発する悪性腫瘍であり低悪性度から高悪性度まで幅広い異型を示すが、低悪性度の症例では細胞診断がしばしば困難で多形腺腫などと誤認される。今回、術前に粘表皮癌と診断できなかつた一例について若干の文献的考察を加え報告する。

⑬ 口蓋裂手術における内視鏡を用いた撮影の有用性

昭和大学藤が丘病院 形成外科
○渡辺晃大、西村怜、多和田真之介、守屋光、小笛俊彦、山田浩之、大久保文雄、
門松香一

手術において広い視野を得ることは、手術成績の向上に直結する、重要な要素の一つである。しかし、口蓋裂手術はその術野が極めて深く狭いことから、視野の確保に難渋することも少なくない。

今回、われわれは口蓋裂手術において内視鏡を併用することで、術者や助手のみならず、術野外の医師も良好な視野を共有することができた。また、同時に手術手技を撮影することもできた。
口蓋裂手術における内視鏡を用いた撮影の有用性について、若干の考察を交えて報告する。

⑭ 耳下腺腫瘍摘出後に生じた下口唇麻痺の1例

昭和大学藤が丘病院 形成外科

○松浦聰司、高木信介、門松香一、大久保文雄

症例は48歳女性、下口唇の左右差を主訴に受診。耳下腺深葉切除後に生じていることから左下口唇麻痺と診断し、大腿筋膜移植術を施行した。術後、開口障害なく、整容的にも改善されたため若干の文献的考察を加え報告する

以上